

文教大学 教育学部

私立大学として小学校教員採用者数10年連続で全国第1位・中学校教員採用者数4年連続で全国第1位の実績を持つ文教大学教育学部。国語、数学など教科ごとの専修に分かれ、実際の教育現場を意識したきめ細かな指導を通じ、知識と指導力を備えた教育者を育成します。



■大学生
高山大輝 さん



■先生
山下直 先生



■卒業生
片山ゆり さん

CONTENTS

- プロフィール
- 大学生活について
- 就職活動、仕事について
- 5年後に向けて
- 高校生へのアドバイス

●プロフィール

お二人の入学の動機を教えてください。

■大学生

中学生の時に会った先生を尊敬し、漠然と先生になりたいと思っていました。高校に進んでもその決意は固く、教育以外の道に進むことはあまり考えられませんでした。

■先生

それで文教大学に？

■大学生

いろいろ調べていくと文教大学なら小学校の免許と中高の免許が取得できることに魅力を感じました。先生を目指すきっかけは中学の時の先生でしたけれど、色々な可能性があったほうがいいと思いましたので文教大学に決めました。

他の大学も検討されましたか？

■大学生

はい。最終的には文教大学にしました。共に教師を目指す同級生がいたということも選択する際の材料でしたが、「先生」って一口に言っても小学校から高校、大学まで様々です。ここでなら、多様な「先生」の分野に広がりが見られると予感したのです。

■先生

その中学校の先生はよほど高山さんに影響を与えたんだね。

■大学生

そうですね。ダメなことはダメ、良いことは良いとはっきりものが言える先生でした。今も連絡をとらせてもらっています。

それは素晴らしい関係ですね。それでは片山さんも文教大学に決めた理由を教えてくださいませんか？

■卒業生

他の大学を受けようと考えていましたが、学力の面やいろいろなことで悩んでいた時に母が「文教大学がいいんじゃない？視野に入れてみたら？」とアドバイスをしてくれました。

■先生

お母様は文教大学のことをご存じだったのですか？

■卒業生

実は母は教員なんです。

■先生

それならご存知ですね。

■大学生

お母様から文教大学はどう見えていたのでしょうか。

■卒業生

母は「文教大学出身の先生は非常に実践力がある」ということをいつも言っていました。母の勤務先に学生ボランティアで来ていた文教大学の学生がいたようです。

■大学生

私も現在、大学のプログラムの一環としてボランティアで小学校に行っています。そのように評価されているのですね。

文教大学の学生の質の高さがうかがえます。改めて教育学部の学びについて教えてください。

■先生

教育学部では指導に必要な学術的な知識に加え、クラスの運営そのもの、あるいは生徒をどう導いていくかという教育手法。そして、教師として道徳的に何が必要かといった心の部分も磨いていきます。

■卒業生

教員になるために必要なことを、仕事と直結するレベルで学べる大学だと周囲からは見られているようです。



■先生

それで間違いないと思います。教科書を読み上げることが指導ではありません。「生徒たちの興味を引くには？」「生徒たちを集中させるには？」「このような力をつけさせたい時にはどんな方法を用いれば良いか？」。わずか数十分の授業時間の中でいろいろな工夫が必要となります。そういった工夫やアイデアを自分で考え、実際の授業に応用する行動力を養うことも教育学部の重要な使命だと考えています。

知恵と行動力を兼ね備えた教師育成のための特徴的なカリキュラムなどがありますか？



■先生

文教大学では教科ごとの専修に分かれているのが特徴のひとつです。

■大学生

それは他大学と違う部分ですね。他の大学の教育学部で学んでいる友人もこれについては、非常にうらやましい環境だと言っています。

■先生

特に小学校教員の免許を取得できる私立大学において各教科専任の教員が充実しているという大学はそれほど多くないと思います。しかも、講師の先生も含めて、教育現場の事を知っている先生が非常に多い。ですから学生たちが教育現場で、どんなことに困るか、何につまずくかっていうことをわかった上で指導にあたることができるのです。

教科ごとに先生がいることのメリットは何でしょうか？

■先生

国語、算数、理科、社会といった基本的な学問から図工といったもののまで小学校の先生は全ての教科を教えます。当然、教科ごとに教え方のポイントも違ってきますが、各教科の専門家が実際の授業を想定し、各教科の本質をしっかりと理解できるように指導できることです。

例えば「先生と生徒の付き合い方」も指導されるのですか？現在、学級崩壊といった話題も耳にしますが、そういった「学校で困ること」への対策を練ることも授業内容に？

■先生

そのようなケースは「生徒指導」に関わる分野で、その分野に精通した先生がいらっしゃいます。教育は時代ごとに要求されるものが変わり、向き合わなければならないことも変わります。それも意識した教育者の育成が責務だと考えています。

印象に残っている授業などがありますか？

■卒業生

3年次から始まる演習が記憶に残っています。

■大学生

私もそれは同感です。

■卒業生

授業内容としては数人でグループをつくり、授業の在り方を考えると同時に指導方法そのものを考えていきます。

■先生

指導方法は、その学校の方針や先生によって様々です。結局、どうやって教えるかは各々の考えや方針によるところが大きく、文教大学の演習では、教科のさまざまな専門領域について深く学び、その学びを「指導案」の作成に生かして教育現場に落とし込む力をしっかり養うということなのです。

どんな「指導案」をつくりましたか？

■卒業生

算数の進め方は記憶に残っています。算数の授業の導入5分間の流れをつくるというものでした。

題材となったのは小学校3年生の割り算でしたが“パイが12個あります。4人で分けるには1人何個になりますか？”という問題を、どうすれば、興味深く子どもたちが取り組んでくれるかを考えながらつくりました。

■先生

学生が作成した「指導案」の内容は皆で検討し課題や成果について議論します。



■卒業生

私は国語のクラスの学生に向けて発表しました。「こうしたほうがいいんじゃないか」「子どもの興味を高めるには、もっと違ったアプローチもあるのでは？」といった感じで意見を重ねます。とても緊張しました。

■大学生

私自身も「指導案」をつくって実際に授業を行うことがこれから増えていくのですが、

どの教科でも言われるのが、導入をしっかりと構築して、児童・生徒の関心をいかに自分に向けるかが大事だということです。授業の入り口でつまずいたらその1時間が無駄になってしまいますからね。導入はどうか？真ん中は？終わりは？授業の流れを、専門性の高い先生方から学べることは非常に良いことだと思います。

■先生

4年生になると、教育実習や保育実習、教職実践演習など、大学で学んだことを実際の現場で磨いていく演習や実習が非常に多くなってきます。4年間の学びの集大成として位置付けられますが、文教大学でも手厚い指導を行っています。

さすが教員育成において、国内屈指の実力を誇る文教大学ですね。

■先生

教員になることとは直接関係はないかもしれませんが、アメリカ学校教育研修というものもあります。2週間ほどワシントンに滞在し、生徒の前で英語を使いながら日本の文化について紹介する授業を行います。その経験も後の糧となるでしょうね。

海外研修は必修となりますか？

■先生

30名ほどを上限に選抜という形をとっています。3年生の希望者を優先し、残った枠を2年生の希望者の中から選抜しています。

文教大学の教育において大切にされていることはなんですか？

■先生

建学の精神である「人間愛」につきます。教育をする側も受ける側も人間です。だからこそ思いやりの気持ちが大事だと考えています。先ほど、児童・生徒の興味・関心を引くには？といった話題がありましたが、相手をよく見て、今何を求めているかを考えることは、広い意味でひとつの思いやりの表れといえるでしょう。

■卒業生

思いやりといえば、文教大学の学生は「人あたりが良い」「真面目」という評価を受けることが多いです。

■先生

それは間違っていないと思います。教育者を目指して入学してくる人ばかりですし、将来の目標がしっかり定まっているわけですから、おのずと学生生活もちゃんとしたものになる。勉強もサークルも一生懸命に取り組む学生が多いですし、大学自体もそういう人間を積極的に育てていこうとしています。

●大学生活について

サークル活動、環境の良さ、面白かった授業など、学生生活について教えてください。

■大学生

私は野球のサークルに入っていますが、多くの人と出会えることが良いと感じています。チームの中には他学部の学生もいて、スポーツを通じて自然と仲良くなることができ、学び以外の部分でも人とのつながりが持っています。

■卒業生

私は専修というクラス単位でまとまって動くことに、人と人が深いつながりを持てるのではないかと考えていました。

■先生

それはいったいどういう意味で？

■卒業生

目標や課題に対して、同じ方向を向いているからこそ深まる人間関係、友人関係があるということです。

■大学生

サークル活動はされていなかったのですか？

■卒業生

私は演劇部に所属していました。そこで出会った仲間は、なんでも話せる私の財産となっています。

強いサークルや部活動などありますか？

■先生

野球部や、吹奏楽部です。

■大学生

吹奏楽部は有名です。いろいろな大会で賞をとっており、たくさんの数のトロフィーが飾られていますよ。

■卒業生

吹奏楽部に入部するために、文教大学に入学した学生もいますね。

■先生

地域のイベントにも参加しているようです。

■卒業生

ショッピングモールでの演奏会のことですね。

■大学生

野球部は、2015年に「第38回全日本学生軟式野球選手権大会」で5回目の優勝を果たしました。

■先生

トランポリン部も好成績を残していますよ。勉強とスポーツの両立。立派で頼もしい学生ばかりで、大学としてはうれしい限りです。

■大学生

オープンキャンパスの評判もいいですよ。

■先生

在学生が学校の施設などを案内するのですが、その対応が非常に良かったので入学したという声はよく聞きます。また、先生と学生の距離が近いことも文教大学らしさなのではないでしょうか。

■卒業生

それは感じます。先生と学生という関係でありつつ、とてもフレンドリーに接していただけます。

先生方との親密な関係があるから、乗り越えられた困難なこともあるのですね。



■卒業生

学習で行き詰った時は、よく先生方の研究室に駆け込んでいました。どの先生方も、「どうした？」とやさしく声をかけてくださいました。先生は覚えていらっしゃるかもしれませんが、山下先生の授業ではないことも、研究室へ質問に行ったこともあるんです。

■先生

そうでしたか。講師陣も教育者ですから、困っている学生を放っておけないです。

良好な関係を築けるのはなぜでしょう？

■先生

担任制ということも関係あるでしょうね。

■大学生

定期的に面談を行い、学生が思っていることや悩みを打ち明ける機会があるのは、とても良いことだと思います。

■先生

学年の初めに面談も行いますし、それぞれの専修の人数がそれほど多くないため、何か不安を抱えている学生の様子も把握しやすいですね。教員の間でも「誰々さんは最近とてもがんばっているね」など、話題にすることもあります。そういう意味では、他大学に比べて一人ひとりに目が届きやすい環境といえます。

■大学生

授業も少人数制なので、学びの密度がとても濃いです。

■卒業生

専修単位の授業なら 40 人くらいで、それを超えることはほとんどないです。

■大学生

大勢のクラスでの授業もありますが、2 年生からは少人数のクラスになっていきます。先生との距離が近いから、居眠りなんかはできないですよ。

■先生

居眠りはさておき、「授業に集中する」という姿勢はひしひしと感じます。

高山さんはどのような学生生活を送られていますか？

■大学生

一人暮らしをしながら、大学とアルバイトを両立させて頑張っています。週に 2 回ほど、野球サークルの練習にも参加しています。3 年生になってからは、仲間たちと課題に取り組んだり、テスト

前は自分一人で図書館にこもって集中したりと、積極的に学ぶ時間も増えてきました。

■卒業生

課題では模擬授業の展開案などをつくっていますか？

■大学生

そうですね。模擬授業の展開を考えては先生に提出し、改善点やここはもっとこうしたほうが良いなどのアドバイスをいただきながら、良い授業の流れができるように練り直していきます。

●就職活動、仕事について

片山さんにお伺いします。現在の取り組みについて教えていただけますか？

■卒業生

現在は大学院で『短詩系文学教材の指導と評価の方法』というテーマで研究を行っています。

■大学生

どういった内容の研究ですか？

■卒業生

簡単に言うと、短歌や俳句を国語という教育において、どのように指導していけば効果的かを考えると共に、それを実践的に盛り込んだ具体的な指導方法をつくることです。

短歌や俳句の有意義な教え方・学び方をつくりだす。そんな感じですか？

■卒業生

はい。それに近いですね。現代における短歌や俳句と子どもたちの関係性を考えていきます。短歌や俳句は歴史の中で形作られてきた言葉使いのため、外国語のような雰囲気にも受け取られることがあります。だからこそ、あえて母国語の学習という観点で見えていかなくてはならないと、言葉と学びをとりまく様々な事象を整理している段階です。もっと親しみを持って短歌や俳句と接してもらうことが私の願いです。

■大学生

研究をされていて面白いと感じるところはどこでしょうか？

■卒業生

だんだん自分の考えていることや方向性が明確になっていくところです。研究当初は、「この本が参考になりますよ」と先生方にご指導いただいていたのですが、時には、自分の進む方向性がわからなくなることもありました。ようやく最近になって、自分なりの考え方や進め方が見えてきました。

■先生

困ったことがあればいつでも私のところに相談にくるといいですよ。

■卒業生

ありがとうございます。

卒業後の進路について伺います。やはり教員になる学生が多いのですか？

■先生

そうですね。ほぼ全ての学生がさまざまな学校に就職します。小学校と中学校教員採用者数でいうと、私立大学で全国第1位という実績です。

■卒業生

教育実習で、文教大学出身の先生方がいらっしゃる確率は非常に高いと感じます。

■先生

関東圏では、それはあるかもしれませんね。

■大学生

ボランティアで行った学校でお手伝いさせていただいた先生が、文教大学の卒業生でした。それほど年齢が離れていなかったのも、とてもいい雰囲気でも過ごせました。いろいろ相談にも乗っていただきました。

■先生

先輩たちは皆、文教大学で学ぶということを一人ひとりの学生がプライドを持って積み重ねてきています。こうした歴史や誇りを耳にした今の学生は、自分の不注意や怠慢でそれを崩してはいけないという思いがあるようです。非常に真面目で責任感の強い学生が多く、「教員になりたい」と思っている人にとって、とても恵まれた環境だと思っています。

●5年後に向けて

片山さんは教員ではなく、言葉の研究者として活動されるのですか？

■卒業生

そうですね。そういった道もあるとは思いますが、私の場合は両親から「教員免許を活かすのは、大学院卒業後でもいいんじゃないの」と言われ、大学院に進みました。

■先生

実際、大学院を経て教員になる人も多いですよ。大学院で2年間研究活動に没頭し、修士論文を書き上げます。研究分野の専門性が高まった状態で教壇に立つことは、人に何かを教えるという「教師」の役割においてプラスになることは多いと思います。

今後の目標について、高山さんはいかがですか？

■大学生

まずはちゃんとした教員になることが目標です。今年から教師になった先輩がいるのですが、サークルでのお別れ会でその先輩が「クラスの全員を算数好きにするのが夢だ!」と言っていたのがとても印象に残っています。私も中学の先生に影響を受けたように、どんな形であれ、これから出会うことになる生徒たちに何か大切なことを伝えていきたいと思っています。

■先生

素晴らしいことだね。片山さんの目標は？

■卒業生

私は元気で笑顔があふれる教員になりたいと考えています。私が大学3年生の時に小学校のボランティアで出会った先生の笑顔が本当にステキで。子どもたちの指導は大変なこともたくさんあるのですが、その方はいつも「愉快的クラスですね」とサラリとおっしゃるのがとても印象的で、私もそうなりたくて憧れを抱きました。



●高校生へのアドバイス

「教師になりたい」という夢を持っている高校生にやっておいたほうが良いことなどがあれば教えてください。

■卒業生

国語はしっかり学んでおいた方がいいでしょう。また私は、できるだけ本を読むようにしていました。

■先生

語彙力を伸ばすには、本を読むのが一番大事だと思います。気に入った言葉やフレーズをメモなどに残しておけば、自然と言葉の使い方が身につく、それは良好なコミュニケーションをはかる上でも役に立つものとなります。

■卒業生

それはいいことを聞きました。私も本を読む時にそれを実行してみます。

■先生

人と接する「教師」は、人間性を養うことが大事です。部活動での先輩・後輩の関係の中で、それは十分に得ることができると思いますがお二人はどうですか。

■大学生

野球サークルで先輩や後輩と接することも多く、確かに実感します。なんらかの部活に入って、意識的にいろいろな人と交流を持つことが良い経験になると思います。

■先生

学習の面については、どんな学問であれ、基礎や原理が大事です。結局、そこがしっかりしていないと学力は伸びません。

■卒業生

基礎ほど大事なものはありませんね。

■先生

全くその通り。私も高校生に戻れるなら、もっと本を読んでおけばよかったと思いますよ。

進路選択などで迷っている高校生に向けてのメッセージをお願いします。

■卒業生

私は中学校でのボランティアを今も続けていますが、毎年中学3年生の生徒たちが卒業していく中で、その生徒たちには「いつ始めても遅いことはない」という言葉を贈っています。

■先生

その言葉を選んでいるのはどういう理由で？

■卒業生

私自身もそうだったのですが、高校生だから勉強するのはもう遅いのではないかといった不安に駆られることがあると思います。でもそういう時に「いつ始めても、遅いことはないんだよ」って背中を押してもらくと、肩の力が抜けて不安が解消した経験があるからです。

■先生

「ちょっと頑張って一歩踏み出してみる」ということが大事でしょうね。進路が定まらない、何をしたいのかわからないということは、知らないことが多くて自分では判断できないということなのです。ですから、興味を持ったことはまずやってみること。失敗しても、それは自分に合わないことなのだと、自分を知るきっかけになるわけですから、決して無駄ではありません。

●インタビューに答えていただいた方々●

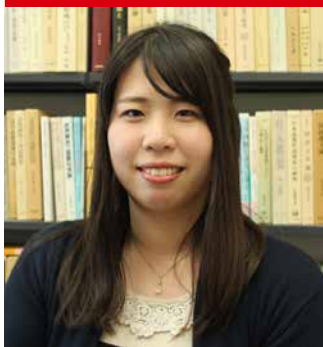


■先生

山下直先生

教育学部学校教育課程国語専修准教授

神奈川県立光陵高等学校出身。筑波大学第一学群人文学類日本語学卒業・同大学大学院修士課程教育研究科 教科教育専攻国語教育コース修了。東京学芸大学附属高等学校 文部教官教諭、文部科学省 初等中等教育局 教科書調査官を経て、現在は専修大学文学部の講師も兼務しながら指導にあたる。研究分野は教科教育学、日本語学など。「主体的・対話的で深い学びを促す中学校・高等学校国語科の授業デザインーアクティブ・ラーニングの理論と実践」「新しい時代のリテラシー教育」などの著書も多数。



■卒業生

片山ゆりさん

文教大学大学院教育学研究科学校教育専攻修士課程2年生(2017年5月取材当時)

埼玉県立与野高等学校出身。文教大学教育学部学校教育課程国語専修卒業。教師である母のアドバイスも受け文教大学に進学。現在は大学院に進み短歌・俳句という日本の伝統文化を後世に伝えるための指導方法についての研究に取り組む。学校に赴き授業をサポートするボランティアで出会った小学校教諭のような「元気で笑顔な先生」になることが将来の夢。



■大学生

高山大輝さん

文教大学教育学部学校教育課程国語専修3年生(2017年5月取材当時)

千葉県千葉西高等学校出身。野球サークルに所属、スポーツと学問に打ち込む教師の原石。そもそも教師を目指すきっかけとなったのは中学校時代に出会った部活動の先生の影響が大きいとか。国語の先生になることを目標とする彼は読書家の一面も。ジャンルを問わず様々な本を読破、時に中古書店で10冊ほどまとめて小説を買う時もあるそう。